

不登校経験者へのメッセージとしての多様なライフストーリー

- Fonte に連載された著名人インタビューを手がかりに -

竹中（井上） 烈

Life stories as messages to person experienced School non-attendance :
from a considerable personage's interviews serialized in "Fonte"

Takeshi TAKENAKA, formerly INOUE

1. 問題関心

不登校という価値の潮流

本稿では、NPO 法人全国不登校新聞社が定期発行する「Fonte（旧不登校新聞）」¹に連載された著名人インタビューを手がかりにして、日本のフリースクール運動や不登校という状態そのものを肯定している価値観の担い手へ焦点をあて、不登校経験者のあるべき姿がどのように提示されているかについて検討したい。今回は 1950 年代以前の日本で子ども時代を過ごした人物に絞って検討を行いたいと考える。

現代日本では、学校に通わない、もしくは通えない子どもを「不登校」として教育問題と捉えるまなざしが根強い。文部科学省は「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため、年間 30 日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と不登校を定義し、「平成 24 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、平成 24 年度の小・中学校不登校児童生徒数は 11 万 3 千人であり、その割合は小・中学校における全就学人数の 1.09%を占めると報告している。

一方で、こういった「不登校」に対して肯定的な解釈を行い、公的な学校から距離を置きながら、フリースクールという不登校生の居場所づくりを行う人々も存在する。日本におけるフリースクールの先駆けは 1986 年に設立された「東京シューレ」であり、フリースクールの活動実践では、常に子どもの感情を「受容」し「共感」することが求められ、不登校という状態を肯定的に理解するという特殊な関わりかけが求められる（井上 2012）。

フリースクール活動を行う人々にとって、現在も東京シューレは大きな影響力を持ち、近年では「多様な学び保障法」を策定し、国会に提出しようとする動きも見られる。高山（2013）に拠れば、2012 年 7 月に開かれた「多様な学び保障法を実現する会」の設立総会では、「設立の発起人には、フリースクールやオルタナティブ教育の主宰者、医者、研究者など 32 人が名を連ね」、「テレビ局の取材のなか、発起人や国会議員、当事者などの人々」がそれぞれの想いを語り、「200 人ほどの参加者」が集まったとされる。

こういった一連の動きからもわかるように、東京シューレが示す不登校像や教育観に一定の

人々が共感し、ひとつのムーブメントが存在し続けていることは興味深い。日本のフリースクール研究には、フリースクールという居場所の機能や特性の研究（朝倉 1995、貴戸 2004、森田 2008、佐川 2010）や日本の学校制度とフリースクールの関係性や位置づけの研究（菊池・永田 2001、王 2007）があるが、フリースクールの不登校像や教育観の存在を前提条件にした研究であるため、本稿の問題意識からは距離がある。不登校がどのように問題化されていったかという社会構築主義的な研究（工藤 1994 1995、加藤 2012）も存在するが、日本社会における不登校という問題そのものに焦点を当てており、フリースクールが提示する不登校像や教育観は対象に据えられていない。よって、フリースクールが提示する不登校像や教育観に誰が共感し、どのように再発信されているのかを検討することは、フリースクール研究に新たな視点を与えることができると考える。

2. 研究の視角

「Fonte」という対象資料の特性

「Fonte」はNPO 法人全国不登校新聞社が定期発行する「日本で唯一の不登校・ひきこもり専門紙」である。1998 年から月 2 回のペースで発行されつづけており、2014 年 1 月 15 日で 378 号の発行を迎える。創刊当初は 6000 部を発刊していたが、2012 年には採算ライン 1100 部を下回る 820 部まで落ち込み、休刊危機にまで追い込まれた。現在は 1600 部まで回復し、発刊を継続している²。

対象紙の創刊目的は、子どもの自殺事件を受けて『学校に行くか死ぬかしかないという状況を変えたいと願った市民らが 1998 年に「不登校新聞」を創刊した』という奥地（2005）の発言からもわかるように不登校を社会問題として捉えるまなざしに異議申し立てを行い、不登校を取り巻く価値そのものを問い直すことが目的とされている。

対象紙の購読者層は具体的には公表されていないが、「不登校の関連団体や元読者」に存続危機を訴えるチラシを配ったとする事実や、当事者が当事者に肯定的なメッセージを届けることにオリジナリティを見いだしている点を考慮すれば、全国の不登校生の居場所や東京シューレの活動への賛同者、不登校当事者やその家族が購読者であると推察できる³。

また、当事者の体験談や相談欄、全国の親の会の紹介記事を掲載する一方で、著名人へのインタビュー記事が主要なコーナーとして創刊当時から継続して掲載されている。インタビュー対象者は学者・芸術家・社会運動家など様々だが、共通していることは自身のライフストーリーを「不登校経験」を肯定的に捉える視点で、不登校経験者へのメッセージとして語ろうとしていることである。

不登校体験が持つ意味の時代的差異

現代日本において、不登校体験を教育問題とするまなざしが根強いという点は先述した通りだが、このまなざしの強度は時代状況によって差異があったと考える⁴。保坂（2000）によれば、初めて長期欠席調査が開始されたのは、文部省と中央青少年問題協議会が全国調査を行った 1950 年であり、小学校でおよそ 30 万人（出現率 4.15%）、中学校でおよそ 34 万人（同 7.68%）

という結果が報告されたと指摘する。戦後日本の教育問題の変容を論じた広田（1998）や子どもの問題行動言説の変容を論じた伊藤（1996）によれば、教育問題や子どもの問題行動は1950年代には「貧困などの社会の問題」と結びつけられて理解されていたものが、1960年代を経て「学校や教育も問題」と位置づけられ、1990年代以降は「心の問題」へと変容していることを指摘している。

先ほど示した「平成24年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の報告結果も、出現率の単純な比較で見ると、1950年の調査結果の方が出現率は深刻である。にもかかわらず、不登校が現在も主要な教育問題として位置付けられていることを考えると、これまでの時代と現在の不登校を問題視するまなざしを同質なものに見なすことは妥当ではなく、特にまだ教育行政上の問題として扱われていない1950年代以前には多種多様な「不登校」体験を含みこむまなざしの寛容性があつたと推測すべきであろう。

そういった当時は問題性を帯びていなかったはずの多様な「不登校」体験が、「Fonte」の言説空間の中で引き合いに出され、不登校言説として取り込まれているかを検討することは「Fonte」の言説空間の特殊性をさらに際立たせるだろう。具体的に対象資料のライフストーリーを語り手が過ごした時代によって区分し、1950年代以前の日本で子ども時代を過ごした人物に絞って検討を行い、彼らの「不登校」体験の語られ方やそれを語る意図について考察したい。不登校体験が持つ意味の時代的差異を考慮し、問題性が構築されていなかった時代の彼らの「不登校」体験がいかに「Fonte」の言説空間の中に取り込まれ、提示されているのかを検証することによって「Fonte」が持つメディア役割をより鮮明に捉えることができると考える。さらに日本の社会状況の変容も考えあわせて、1945年以前に生まれたインタビュー対象者を1950年代以前の日本で子ども時代を過ごした人物として操作的定義を行う。

よって本稿では、多様な著名人が自身の半生や活動を振り返りながらインタビュアーの質問に答える「この人に聞く」に掲載されたインタビュー記事を資料として用いて、今回は特に1945年以前の日本で生まれた人物のライフストーリーに絞って検討を行うこととする。

3. 学校教育体験を語るライフストーリー

インタビュー対象者の属性

本稿では、多様な著名人が自身の半生や活動を振り返りながらインタビュアーの質問に答える「この人に聞く」に掲載されたインタビュー記事を資料として用い、1998年5月の第1号から2012年12月の352号までの内容分析を行う。対象期間中のインタビュー対象者は総計226人であり、1945年以前に生まれたインタビュー対象者は48人（問題関心を踏まえて、海外で学校教育を経験している日本人や外国人は除く）であつた。

インタビュー対象者の属性を表1と表2にまとめた。表1・表2を見ると、医者や学者を含む「専門職」や音楽家や芸能人を含む「芸術・芸能」が共に合わせて半数以上を占めている。

一方で「政治家」や会社経営者を含む「企業人」は非常に少なく、表2の「企業人」は該当ケースが確認できなかった。「Fonte」の言説空間は、企業経営といった資本主義的価値観と距離があるのであろう。実際に「市場万能主義からの転換を」（暉峻淑子・埼玉大学名誉教授、

2003年135号リード文)や『「いい学校からいい会社」という幻想を崩す』(佐高信・評論家、1998年16号リード文)といったような資本主義社会や学歴社会の在り様を斜めから見る視点をもった知識人の言説が目立って確認された。また「頭より体の要求に従うこと」(横尾忠則・芸術家、2002年100号リード文)や「外れることをポジティブに」(加藤登紀子・歌手、2003年126号リード文)といったような既存のレールからはみ出した人生を肯定する芸術家や芸能人の言説も多く確認され、まさに学校言説から距離を置いたオルタナティブな言説を提示しているといえる。

表1 全インタビュー対象者の内訳(重複あり)

専門職	教育実践家	企業人	政治家	文筆家	芸術・芸能	社会運動家	合計
48	14	2	8	42	77	40	231
20.8%	6.1%	0.9%	3.5%	18.2%	33.3%	17.3%	100%

表2 1945年以前に生まれたインタビュー対象者の内訳(重複あり)

専門職	教育実践家	企業人	政治家	文筆家	芸術・芸能	社会運動家	合計
19	6	0	3	9	15	7	59
32.2%	10.2%	0.0%	5.1%	15.3%	25.4%	11.9%	100%

表3 初等教育及び中等教育における学校教育体験を語るライフストーリーを含む16ケースのインタビュー対象者

号数	年	月	対象者	誕生日	略歴
8	1998	8	渡辺位	1925	児童精神科医/日本医科大学卒業。定年退職後、東京シューレを中心に執筆、講演活動を行っていた。(2009年逝去)
22	1999	3	最首樞	1936	障害者を普通学校へ・全国連絡会運営委員/東京大学卒業。教養学部助手を27年間務める。
23	1999	4	高木仁三郎	1938	高木学校主宰/群馬県立前橋東高校→東京大学卒業。脱原子力運動に力を注いだ物理学者。(2000年逝去)
36	1999	10	鏡見俊輔	1922	哲学者/東京高等師範附属中学卒業後、ハーバード大学にて哲学を学ぶ。戦後、丸山真男らと『思想の科学』を創刊。60年安保では東京工大教授を辞職し、「ベトナムに平和を! 市民連合」にて、反戦平和運動で活躍した。
50	2000	5	森毅	1928	京都大学教授、数学者/旧制北野中学校→旧制第三高等学校→東京帝国大学卒業(2010年逝去)
60	2000	10	原一男	1945	映画監督/東京総合写真専門学校中退。『ゆきゆきて、神軍』(1987年)により、ベルリン国際映画祭にてカリガリ映画賞、パリ国際ドキュメンタリー映画祭グランプリ受賞。
65	2001	1	谷川俊太郎	1931	詩人/東京都立豊多摩高等学校卒業。翻訳家、絵本作家、脚本家でもある。
77	2001	7	吉本隆明	1924	思想家/東京府立化学工業学校→米沢高等工業学校→東京工業大学卒。詩人、文芸評論家。日本の戦後思想に大きな影響を与えた。(2012年逝去)
87	2001	12	別役実	1937	劇作家/長野北高校→早稲田大学中退
91	2002	2	田英夫	1923	元衆議院議員/東京大学卒業(2009年逝去)
107	2002	10	毛利子来	1929	小児科医/岡山医科大学卒業
126	2003	7	加藤登紀子	1943	歌手/駒場高等学校→東京大学卒業
130	2003	9	なだいなだ	1929	精神科医・作家/旧制麻布中学→産康義塾大学医学部卒(2013年逝去)
135	2003	12	陣崎淑子	1928	埼玉大学名誉教授/日本女子大学→法政大学大学院経済学博士
240	2008	4	野中広務	1925	元自民党幹事長、官房長官/旧制京都府立園部中学校卒業
241	2008	5	石牟礼道子	1927	水俣病被害者・作家/水俣実務学校卒業

これらをふまえた上で、1945年以前に生まれたインタビュー対象者がどのようなライフストーリーを用いて、フリースクールが提示する不登校像や教育観を肯定的に再発信しているのかを検討したい。奥地(2005)が、不登校の「原因の多くは学校にある」と述べるように、フリースクールが提示する不登校像や教育観は現代学校制度への批判と密接に結びついている。

1945年以前に生まれたインタビュー対象者48人の内、初等教育及び中等教育におけるライフストーリーが含まれたインタビュー記事は16ケース確認できた。よって、ここでは16ケースの初等教育及び中等教育における学校教育体験を語るライフストーリーに着目し、学校批判の類型化及び分析を行

いたい。初等教育及び中等教育における学校教育体験を語るライフストーリーを含む 16 ケースのインタビュー対象者のプロフィールは表 3 に示したとおりである。

表 3 からわかるように、多くが大卒で学歴は高く、医者や学者といった専門職といった社会的地位を確立させている人物である。彼らは「結果的」には学歴社会における成功者であり、そういった立場から不登校経験者に不登校を肯定する言説を提示するという構図は興味深い。彼らが語るライフストーリーは多様なものであるが、どのように現代学校批判を行うかによって違いがみられ、3 つのプロットに類別できる。それぞれを①国家主義的教育への批判、②大人（教師）への不信、③学びの在り方への批判とした。この類型に沿って、特徴的なライフストーリーを検討していきたい。

国家主義的教育への批判

国家主義的教育への批判にあてはまる事例は全 4 ケース確認できた。なだいなだの事例では、彼が経験した戦時中を「不自由な時代」とし、親や教師・国の「権威」を批判的に捉えるライフストーリーが展開されている。

僕が小学校のときはまったくの戦争中でした。親や教師が強い権威を持っていて、子どもは逆らえず、同じように親や教師も国の命令にはまったく逆らえませんでした。世の中全体が上から下に命令するだけの時代でした。もちろん子どもながらも疑問に思うことはありました。（中略）しかし、教師には「よけいなことを聞くな」とねじ伏せられただけで、田舎にいれば、そういう質問をするだけでビンタをくらうこともあるような、とても不自由な時代でした。（なだいなだ、Fonte 2003 年 130 号）

彼が強調しようとしているのは、そういった不自由な時代における「不条理さ」である。彼が言う「不条理さ」は現代でも根強く残っており、それは学校に行かなければならないことであると結びつける。

現代は自由になったと言えます。しかし、すべてが自由かと言えば、そうでもない。ほんとうに自由であれば、何の障害もなく学校に行かないことを選べるはずです。ところが、現実には学校だけで人間がはかられています。（中略）もっと時間のある子供時代が必要です。（なだいなだ、Fonte 2003 年 130 号）

ここでは、批判されるべき国家主義的教育の一側面が不登校を問題化させているのであり、自由な社会では「何の障害もなく学校に行かないことを選べるはず」と述べ、現代の学校制度を「子供時代」から「時間」を剥奪する制度として批判的に評価されている。

次に田英夫の事例も確認しておきたい。彼は実際に海軍航海学校に配属され、特攻隊に配属された経験を踏まえながら、戦時の軍国主義教育や戦争自体を直接的に批判するライフストーリーを展開している。

当時は「忠君愛国」をモットーとする軍国主義教育が徹底的に行われていました。小学校の

ころから、教師に「君たちは将来天皇陛下の藩屏になるのだ」と教わりました。他にも教育勅語はもちろんとして、さまざまな軍国主義教育を受けました。言葉の一つひとつは理解できなくても、戦争で人を殺し、人を殺すために自分が死ぬかもしれない。その意味や怖さは伝わってきました。(中略) 死への選択さえ、自由にできなかった特攻隊経験は今でもはっきりと覚えています。特攻隊や戦争で死んでいった彼らの無念もはっきりと感じています。(田英夫、Fonte 2002 年 91 号)

彼は「軍国主義教育」から戦争によって命を奪われる「怖さ」を感じ取り、「特攻隊や戦争」の経験を通して「死んでいった彼らの無念」を回顧している。直接的には語られてはいないが、自身の学校経験を対照させながら、現代の学校教育にも「軍国主義教育」に通じる不自由さが存在することを浮かび上がらせて、その不条理を指摘しようとする語りになっている。

以上、戦時中の教育の在り方を「国家主義」や「軍国主義」の観点から批判し、その本質は現代の学校制度にも引き継がれているとし、現代の学校制度に適應できない子どもたちの正当性を主張しようとするプロットが確認できた。

大人（教師）への不信

大人（教師）への不信にあてはまる事例は2ケース確認できた。谷川俊太郎の事例を検討する。彼は「戦中の軍国教育」から戦後の「民主教育」への急な転換によって、大人や教師のいやらしさが露わになったと語っている。また、学校教育において求められる「同質・均質」を批判的に述べている。

中学校のころから先生と合わなくなった。戦中は軍国教育だったのに戦後から急に民主教育になって教科書に墨を塗ったりして、先生がコロッと変わっていった。その時期の子どもっているのはすごく人間っていうものがよく見えていたような気がするし、僕も15～16歳のころのほうが「大人」っていうものがちゃんと直感的に見えていたような気がします。当時は、ほとんどきれいな教師ばかりでね。そういう先生にものを教わるということ自体イヤだったし、同じ教室にいるのもイヤだった。だから、授業中、窓から逃げたりね(笑)。それは大人のいやらしが見えてきちゃうこと、管理されること、僕自身の資質っていうことが関係していた。「みんなで一緒に何かやりましょう」というのがイヤなのね。異質な人間どうしが協力し合って何かをすることはいいけど、「同質・均質」はイヤでした。(谷川俊太郎、Fonte 2001 年 65 号)

そういった彼の経験から、「僕は学校と合わなかったから、どうしても学校に行かないほうの肩を持ちますね。自分が学校に行けなくなったらミスフィット(適合できない)という感覚が一番強かったと思うんです。(中略) しかし、ミスフィットであるということを活かす道はあって、それは、どちらかと言えば芸術家とか自由業の世界」(谷川俊太郎、Fonte 2001 年 65 号)と不登校を肯定的に評価し、学校に行かなくても自分を「活かす道」はあるとして暗に現代学校制度を批判的に捉えていることがわかる。

また、高木仁三郎の事例(Fonte1999 年 23 号)でも、「夏休みが終わって学校に行くと、ア

メリカの解放政策とかで、なんと日本の軍国主義は野蛮だったと言う。そのときの、急にがらっと変わった大人たちのありさまに、子どもながらに驚きました」という経験から「それが軍国主義であれ何であれ、大きなものに巻かれるような人間のあり方ではダメなんじゃないか」といった大人（教師）への不信を感じたと語っている。加えて「それがイヤだと思った時とき、不登校というかたちで自分を表現する人が大勢出てくるのは、むしろ健全な反応だと思います」といった不登校を肯定する語りが確認できた。

以上、子どもを教育しようとする大人（教師）に不信を抱き、そういった大人（教師）たちが作り上げた学校制度を欺瞞に満ちたものと批判することで現代の学校制度に適応できない子どもたちの正当性を主張するプロットが確認できた。

学びの在り方への批判

学校には本来あるべき学びの形はないとする学びの在り方への批判に該当する事例は 10 ケース確認できた。本来あるべき学びの形は学校教育外にあるとするのが、渡辺位の事例である。彼は 2009 年にこの世を去ったが、「ありのままのその子を受け止める大切さを指摘しておられた児童精神科医の渡辺位さんと、はじめてお会いした日」を境に息子の拒食症が解消されたと彼との出会いの大きさを奥地（2005）が述べているように、東京シューレの設立に多大な影響を与えた人物でもある。

子どものころは体が弱くて、次から次に感染症にかかるので、小学校はほとんど行っていませんでした。不登校のはしりですかね。算数なんかは親父が教えてくれました。（中略）病気のおかげで自分の好きなことができた。学校は学校、自分の生活は自分の生活と、完全に並列していた。僕は小さい頃から絵を描くのが好きで、クレヨンや画用紙をどんどん使うので、親は困っていたようです。しかし、小学校に入った途端描かなくなった。（中略）お手本通りに描かないといけない。コピー機じゃないんだから。お手本通りには描けない。すると、描けない自分はダメなんじゃないかと思えてしまう。（中略）中学三年生のころ、また体調が悪くなって学校を休み、そのときは、国木田独歩、徳田秋声、徳富蘆花などの文学を読んでいました。（渡辺位、Fonte1998 年 8 号）

彼は病弱であったこともあるが、小学校にいていなかった自分を、あえて「不登校のはしり」と当事者としての自己定義を行っている。そのうえで「病気のおかげで自分の好きなことができた。学校は学校、自分の生活は自分の生活と、完全に並列していた。」と学校以外での学びの在り方を積極的に肯定している。また中学校のころは「国木田独歩、徳田秋声、徳富蘆花などの文学」が学校での学びに代わるものであったとしている。

最初は、僕自身、学校に行けないのは全て病的なんだと思っていた時期がありました。（中略）不登校は主として自己防衛的危機回避反応です。それは、当人が承知しているが、命の営みとして、個体としての存在を守るために自然に起こることです。（渡辺位、Fonte1998 年 8 号）

渡辺は不登校を「自己防衛的危機回避反応」とであると定義づけ、「命の営み」であり、「自然に起こること」としている。それはお手本通りに描けず「描けない自分はダメなんじゃないかと思え」た自尊感情の危機を「自分の好きなこと」を学ぶことで回避させた経験が基になっていると考えられる。

また最首悟も「ぜんそくだったのと、親父が結核で母親が働いていて、自分が留守役をしていたのとで、小学校五年生のときに三年間連続で学校を休んでいます」(Fonte1999年22号)と、病気によって学校に行かなかった経験を語っている。

本はよく読んでいましたね。校長の家の子どもに手伝ってもらって、本をひそかに借りてきたりー。結果としては、そこから知識を習得することにもなりましてね。マイナスだったことは、非常識になったことですね。(中略)しかし逆に、その非常識が常識にとらわれないで動けることにもなった。(最首悟、Fonte1999年22号)

彼にとっても学校での学びに代わったのは「ひそかに借りてきた」本を読むことであり、学校外で自分の興味に沿った学びであった。そのことで「マイナスだったことは、非常識になったこと」と述べつつも、「その非常識が常識にとらわれないで動けることにもなった」と自身の不登校経験を能動的なものに読み替えていることがわかる。

学びの在り方への批判に該当する10ケースの中には、例外的に過去に本人が受けた教育と対比させる形で学校には本来あるべき学びの形はないとする事例が1ケース確認できた。暉峻淑子の事例である。

私の通った小学校は、まだ先生方に大正デモクラシーの影響が残っていて、とくに作文の先生がよかったのね、はっきり意見を言う私をきらっていた人もいましたが、逆にすごくかわいがってくれる教師もいた。子どもは自分をわかってくれる大人に出会うことがとても大事だと思います。(暉峻淑子、Fonte2003年135号)

彼女は、「大正デモクラシーの影響」が残った「作文の先生」の教育実践を肯定的に捉え、「子どもは自分をわかってくれる大人に出会うことがとても大事」とであると述べている。そういった環境で育まれた「社会の下の方にいる人たちが、自発的な動きをはじめている。生活を支えながら、一人ひとりが自分の意見を持ち、連帯して新しいものをつくっていかうと」(暉峻淑子、Fonte2003年135号)する動きが大切であるとし、「その典型のひとつがフリースクールだと私は思っています」(暉峻淑子、Fonte2003年135号)と現代の学校教育の不十分さを指摘し、フリースクール運動を肯定的に評価している。

以上、現代の学校で与えられる学びは不自然なものであり、学校外で行われる(もしくは語り手自身が子ども時代に経験した学校教育における)子どもの興味・関心に沿った自発的な学びの在り方こそ意味があるとするものとし、現代の学校制度の意味づけを相対化させようとするプロットが確認できた。

著名人のライフストーリーから発信される不登校経験者へのメッセージ

本章のまとめとして、不登校を肯定するプロットが著名人のライフストーリーを通してメディア発信されることの意味を指摘しておきたい。不登校を肯定するプロットは、「Fonte」という言説空間に著名人のライフストーリーが取り込まれる中で再編成された産物であり、言説空間の固有性に沿った意味が付されると考える。

まず各インタビュー対象者は総じて不登校を否定することではなく、学校に行かず自分の好きな事を自由に学ぶことが良いという価値観を絶え間なく提示し続け、不登校経験者の学校への批判的思いに共感する立ち位置で語りを行っていた。そういった点で、対象紙には、著名人の多様なライフストーリーを提示することで、不登校経験者の「現在」を肯定し、ありのままの「自分」を鼓舞させるカウンセリング的役割があると考えられる。

またインタビュー記事には、毎回著名人の略歴欄が設けられており、著名人自身のオリジナリティや学歴等のステータスの高さが示されている。そういった社会的特性を持ったインタビュー対象者が語る波乱万丈なライフストーリーを通したメッセージには、「現時点で学校に行かなくても、最終的には社会的な成功を収められるサクセスストーリー」というメタメッセージが潜んでいるとも考えられるであろう。

4. 不登校言説の再構成の場としての Fonte

「Fonte」における不登校言説と東京シューレの活動

前章では、1945 年以前に生まれた人物のライフストーリーに絞ることで、1950 年代以前の日本で子ども時代を過ごしたライフストーリーの検討を行った。その結果「国家主義的教育への批判」「大人（教師）への不信」「学びの在り方への批判」をプロットにする 3 類型が確認でき、それらが不登校を肯定する言説として発信されていることを指摘した。公的に不登校の問題性が語られなかった時代の言説が、「Fonte」の不登校言説に沿った新たな意味が付されており、「Fonte」を不登校言説の再構成の場と捉えることができるだろう。では、こういった不登校言説と東京シューレの活動はどのように関連しているのだろうか。

NPO 法人不登校新聞社は東京シューレと同じ奥地圭子氏を代表理事に据えており、編集委員も東京シューレの卒業生が担っていることから、別組織ではあるが非常に密接な繋がりがあると考えられる。「Fonte」では、全国の親の会の活動紹介も頻繁に記事にされている。

親が、世間や専門家の言う通りでなく、子どもに寄り添い、ともに考えてく存在になるためには、孤立してはつらすぎて、また情報が狭すぎてできるものではない。「登校拒否を考える会」をつくって親どうして学び合い、支え合い、泣いたり笑いあったりして本音を出し、考えてきたことがよかった。30 年経ったいまも、親の会の必要性は変わらないと感じる。（奥地圭子、「かがり火」Fonte2014 年 378 号）

「Fonte」の紙面上で奥地圭子氏自身が東京シューレの活動を振り返り、その正当性を主張し

ている記事である。この記事からもわかるように、「Fonte」は独自にその見解を述べるという側面もちろん持ち合わせてはいるが、東京シューレの活動や思想をベースにした編集活動を行っていると考えられ、東京シューレの主張を紙面上に再構成している側面もあると考える。全国不登校新聞社が公表する「平成24年度事業報告書」の中で、「事業実施の方針」を「子ども・若者の不登校・ひきこもりに関して社会的理解を深める。子どもの人権について、その擁護と啓蒙を行なう」（傍点は筆者による）と位置付けていることからわかるように、読者に対して自分たちの理念や主張の正当性を発信し、読者をその中に巻き込んでいくことが意図されている。そういった意味から「Fonte」における不登校言説と東京シューレの活動の関係性は、発信される不登校言説によって、東京シューレの活動が根拠づけられ、東京シューレの活動の実績によって、発信される不登校言説の正当性が増すという相互補完関係に置かれていると言える。

「Fonte」における不登校言説と著名人の思想性の交差

本節では、そういった「Fonte」の言説空間で著名人がメッセージを発信することがもつ意味を考察してみたい。前章で確認したライフストーリーのプロットは、自身の経験への主観的な回顧の形式である。つまり、坂部（1990）が「かたり」について「高度の反省的屈折をはらみ、ときに誤り、隠蔽、自己欺瞞などに通じる可能性をもつ」と述べるように、ライフストーリーのプロットは、インタビュー時点における著名人の思想性に大きく左右されているとも考えられ、その点も考慮されるべきであろう。

前掲の表3からインタビュー対象者のインタビュー時点での社会的位置を取り上げてみよう。最首悟は「障害者を普通学校へ・全国連絡会」運営委員を務めており、高木仁三郎は「高木学校」というオルタナティブスクールの主宰者として紹介されていた。また原一男は「ゆきゆきて、神軍」という日本軍の非人道的行為を明らかにしようとする奥崎健三にスポットを当てた反戦へのメッセージが強いドキュメンタリーを制作した監督として紹介されていた。水俣病被害者という立ち位置でインタビューに応じた石牟礼道子も特徴的であろう。

紙幅の都合から全インタビュー対象者の社会的位置の指摘は省略するが、障害者や公害病被害者といったマイノリティ問題や脱原発や反戦といった現代社会批判を思想の礎としており、不登校問題に対する東京シューレの思想性と共通する部分が多い⁵。著名人が紙面上でメッセージを発信することによって、彼らが持つ思想性や活動の文脈と不登校言説とが交差する点において不登校問題の問題性が提起されるのである。不登校とは異なるイシューを言説空間に取り込むことによって、「Fonte」が提起する不登校言説はさらに訴求力を高めることになり、著名人が持つ思想性や活動にとっても同じことが言える。

前節で東京シューレの活動と「Fonte」における不登校言説の相互補完関係を指摘したが、本節を踏まえば著名人がもつ思想性や著名人が行う活動のメディア発信と「Fonte」の不登校言説の正当化というもうひとつの相互補完関係も見えてとれる。そして両者を考えあわせれば、「Fonte」の言説空間の特殊性は、「Fonte」における不登校言説と東京シューレの活動と著名人がもつ思想性との三者の相互補完関係によって構成されているといえる。

5. まとめ

「Fonte」という言説空間

本稿では、全国不登校新聞社が発行する「Fonte」に掲載されているインタビュー記事を資料として用い、特に 1950 年代以前の日本で子ども時代を過ごした人物のライフストーリーに絞って、そのプロットの類型やメッセージがメディア発信されることの意味を検討した。不登校問題の問題性が見いだされていなかった時代のライフストーリーが、「Fonte」という言説空間に取り込まれる中で、「国家主義的教育への批判」「大人（教師）への不信」「学びの在り方への批判」をプロットにする 3 類型に再編成されることを確認した。そして、それらのプロットは不登校経験者の「現在」を肯定し、ありのままの「自分」を鼓舞させるカウンセリング的役割が付与され、学校に行かなくても達成可能なサクセスストーリーも暗意していた。また、東京シューレの活動と「Fonte」における不登校言説、さらに著名人の思想性のそれぞれ相互補完関係にあり、その三者関係の中で「Fonte」の言説空間が構成されていることも指摘した。東京シューレ独自の不登校像や教育観を支える言説空間とは、「Fonte」による東京シューレの活動や著名人の思想性との折り合わせの産物と言えるであろう。

「Fonte」は、様々なイシューの文脈の上で不登校問題の問題性を「語る／語られる」ことで固有の言説空間を構成していく一種の社会運動体メディアと捉えることができる。様々なイシューを含みこみながらも、その軸がぶれないのは「当事者発信」にオリジナリティを見いだししているからであり、今後もその社会的意義は変わらないであろう。

今回の論考では、1950 年代以前の日本で子ども時代を過ごした人物のライフストーリーに絞ったため、それ以降のインタビュー対象者のライフストーリーの検討を行わなかった。2 章で述べたように、不登校体験が持つ意味の時代的差異を踏まえて対比的に検討される必要があるだろう。また、今回はメディアにおける発信側の考察に重点を置いたので、発信されたメッセージを読者がどのように受け取り、再解釈するかという側面の考察が不十分である。今後の課題としたい。

<注>

- 1 対象紙は 2004 年発行の 148 号より「不登校新聞」から「Fonte」に名称が変更されている。本稿では、紙面構成の変化などの時系列比較といった観点は分析枠組みには含めないことから、便宜上表記の書き分けをせず「Fonte」に統一する。
- 2、3 「休刊の危機！日本で唯一の不登校・ひきこもり専門紙『Fonte』元読者との対話を深め、発行部数倍増へ」『ビッグイシュー日本版』第 213 号を参照。
- 4 朝倉（1995）は、1970 年ごろにアメリカの精神医療の判断枠組みである DSM - IV が日本に取り入れられ、不登校が社会問題化されたと述べている。
- 5 「Fonte」が擁する論説委員の顔ぶれも同じ視点から捉えることができるだろう。「Fonte」の論説委員の顔ぶれと変遷、論説執筆回数をまとめた表 4 を補足的に示す。

表4 論説委員の顔ぶれと変遷、論説執筆回数

1998年～2002年			2003年～2007年			2008年～2012年		
論説者	肩書き	回数	論説者	肩書き	回数	論説者	肩書き	回数
山下美三郎	スクールソーシャルワーカー	9	多田元	弁護士	9	多田元	弁護士	6
若林実	小児科医	9	奥地圭子	東京シュレ代表理事	7	奥地圭子	東京シュレ代表理事	6
安積進歩	カウンセラー	9	安住麻奈	作家	5	内田良子	子ども相談室「モモの部屋」主催	5
浜田寿美男	花園大学教員	9	内田良子	子ども相談室「モモの部屋」主催	5	森英俊	小児科医	4
小沢牧子	大学教員	8	浜田寿美男	花園大学教員・発達心理学専攻	5	青木悦	教育ジャーナリスト	4
津田玄児	弁護士	8	安積進歩	カウンセラー	4	芥沢俊介	評論家	3
内田良子	子ども相談室「モモの部屋」主催	8	小沢牧子	日本社会臨床学会運営委員	4	喜多明人	早稲田大学・子どもの権利条約ネットワーク代表	3
多田元	弁護士	7	喜多明人	早稲田大学・子どもの権利条約ネットワーク代表	4	山下美三郎	スクールソーシャルワーカー	2
芥沢俊介	評論家	7	津田玄児	弁護士	4	浜田寿美男	奈良女子大学・発達心理学専攻	2
奥地圭子	東京シュレ代表理事	6	森英俊	小児科医	4	小沢牧子	日本社会臨床学会運営委員	2
大田豊	日本子どもを守る会名誉会長	6	山下美三郎	スクールソーシャルワーカー	4	津田玄児	弁護士	1
本多勝一	ジャーナリスト	6	若林実	元小児科医	4	高岡健	精神科医	1
山田潤	本紙理事	5	明橋大二	精神科医	4	幸淑玉	人材育成コンサルタント	1
岡村達雄	関西大学教育行政学専攻	3	辛淑玉	人材育成コンサルタント	1	安住麻奈	作家	1
落合恵子	作家	3	本多勝一	ジャーナリスト	1			
安住麻奈	作家	3						
ひろさちや	宗教学者	3						
熊沢誠	甲南大学・労働関係論	1						
合計		110	合計		66	合計		41

<参考資料>

文部科学省, 2013, 『平成 24 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』.
 THE BIG ISSUE JAPAN, 2013, 「休刊の危機! 日本で唯一の不登校・ひきこもり専門紙『Fonte』
 元読者との対話を深め、発行部数倍増へ」『ビッグイシュー日本版』第 213 号.
 全国不登校新聞社, 2013, 『平成 24 年度事業報告書』.
 全国不登校新聞社, 1998, 『不登校新聞』1 号 - 148 号.
 全国不登校新聞社, 2004, 『Fonte』149 号 - 352 号.

<参考文献>

朝倉景樹, 1995, 『登校拒否のエスノグラフィー』彩流社.
 広田照幸, 1998, 「学校像の変容と<教育問題>」佐伯胖他編『岩波講座現代の教育 2 学校像の
 模索』岩波書店: 147 - 169.
 井上烈, 2012, 「フリースクールにおける相互行為にみるスタッフの感情管理戦略」『フォーラ
 ム現代社会学』11: 15-28.
 伊藤茂樹, 1996, 「心の問題」としてのいじめ問題『教育社会学研究』59: 21-37.
 加藤美帆, 2012, 「不登校のポリティクス-社会統制と国家・学校・家族」勁草書房.
 菊地栄治・永田佳之, 2001, 「オルタナティブな学び舎の社会学-教育の<公共性>を再考する」
 『教育社会学研究』第 68 集: 65-84.
 貴戸理恵, 2004, 『不登校は終わらない「選択」の語りから<当事者>の語りへ』新曜社.
 工藤宏司, 1994, 『「不登校」の社会的構築(上)』『大阪教育大学教育実践研究』3: 79-94.
 ———, 1995, 『「不登校」の社会的構築(下)』『大阪教育大学教育実践研究』4: 85-102.

森田次朗, 2008, 「現代日本社会におけるフリースクール像再考-京都市フリースクールAの日常実践から」『ソシオロジ』 53(2): 125-141.

奥地圭子, 2005, 「不登校という生き方—教育の多様化と子どもの権利」NHK 出版.

王美玲, 2007, 「不登校対策としてのフリースクールの可能性—フリースクールの理念と運営体制に関する事例比較を通して」『社会分析』 34: 189-203.

Ron, Miller, 2002, *Free Schools, Free people* State University of New York Press.

佐川佳之, 2010, 「フリースクール運動における不登校支援の再構成：支援者の感情経験に関する社会学的考察」『教育社会学研究』 87: 47-67.

坂部恵, 1990, 『かたり』弘文堂.

Snow, D.A., Rochford, E.B. Jr., and Benford, R.D., 1986, Frame alignment processes, micromobilization, and movement participation. *American Sociological Review*, 51: 464-481.

高山龍太郎, 2013, 「子どもの多様な学びを保障する法律づくり」日本教育社会学会第 65 回大会発表要旨集録.